

『梁塵秘抄口伝集巻第十』における「こゑわざ」とは

——編纂意図に着目して——

永 井 深 緒

はじめに

乱世を渡り歩きながら、人生をある一つの芸能に捧げた天皇がいる。権力争いとは無縁であった少年期から、二十九歳での突然の即位。支配欲の立ち込める宮中で、関わった強者を出し抜き、最期まで武士から天皇家の実権を頑なに守った平安最後の砦。後白河院である。

自由な少年期からか院は芸能に造詣が深く、数多くの絵巻物を作成させた。源頼朝をして「天下第一の犬」と言わしめた院は、それらの娯楽を政治のツールとしても利用し、真剣に向き合った。その院が、自己表現の方法として人生を懸けて没入し、傾倒した芸能。それこそが「今様」であった。和歌とは全く形式の異なる自由な歌謡で、平安時代の都市で大流行した今様。『梁塵秘抄口伝集』はその今様の持つ力を伝えるため、院が自ら書き表し、後世へ残した唯一の作品である。

本作品は、五千余首もの今様を収めたとされる歌謡部『梁塵秘抄』と併せて編纂された。『本朝書籍目録』には「梁塵秘抄 二十巻 後白河院勅撰」と記録されており、各十巻存在すると考えられてい

るが、現存するのは

(1) 『梁塵秘抄』巻第一

(2) 同巻第二

(3) 『梁塵秘抄口伝集』巻第一(巻首)

(4) 同巻第十

にすぎず、その大部分が散佚している。空白部分では多様な形式の今様の髓脳が書かれていたと推測できるが、唯一欠落なく現存する巻第十では、今様と歩んだ後白河院の半生が語られる。

「こゑわざの悲しきことは、我が身隠れぬるのち、とどまることのなきなり。」と本作は結ばれる。その言葉通り、院の崩御後、今様という歌謡は宮廷からはおろか、庶民の間からも殆ど姿を消してしまう。以上のことから、本作品は院が自身の今様鍛錬の日々を振り返りながら、その歌声「こゑわざ」が失われていくことの嘆きを記したものだという解釈が多い。

しかし、そこには本当に院の絶望があるのみであろうか。作品を読み進めていくにつれ、生涯を懸けた今様の正統性、神性を証明するために、院が随所に技巧を凝らしているということに気付く。音としての「こゑわざ」を残したかったのであれば、同じく傾倒した

と言われている読経と同様、「譜」という楽譜を作成すれば良かったはずなのに、今様に関してはそれをせず、「口伝集」という形をとったのはなぜなのか。

本論は、この『梁塵秘抄口伝集卷第十』（以下、『口伝集』卷十）を、経験に基づいた院による今様伝授の論、としてではなく、作者後白河院の目を通して描かれた一つの「文学」であることを念頭に見直し、真の編纂意図と「こゑわざ」の本質を考察するものである。

二 追求した「我が様」

『口伝集』卷十の前半部分で描かれるのは、院の今様鍛錬の半生、そしてそれを支えた傀儡女たちとの交流の記録である。傀儡女とは、陸地を中心に活動していたとされる芸能者で、水辺で客を引く遊女と同じく歌を芸としており、今様の担い手であった。大江匡房『傀儡子記』に「女ハ即チ愁眉・啼粧・折腰歩・鬪齒咲ヲ成シ、朱ヲ施シ粉ヲ傳ケ、倡歌淫楽シテ、以テ妖媚ヲ求ム」とあるが、本作品内においては傀儡女と院との間に肉体的関係は読み取れず、あくまで今様の正統な継承者として登場する。

中でも、今様の名手、乙前おとまへとの交流は、より一層深いものであった。傀儡女発祥の地とされる美濃国青墓(1)を出自とする乙前が歌う今様は、院の理想とする、真に正統な流れを汲むものであった。院は、宮中における傀儡女との応酬を通して、その正統性を読者に示す。

さほのあこまろという傀儡女が、乙前に、どちらの歌う今様秘曲あしがた「足柄」が正しいかを巡る争いを仕掛ける。乙前は却つてあこまろを打ち負かし、自身の「足柄」こそ正統であると大衆の前で証明する。体裁を失ったあこまろは院の前にも関わらず悔しさを顕わにし、

居合わせた小大進こだいしんの背中を強く叩き、「良かむなる歌、又謡はれよ」と言い捨てその場を後にする。

乙前の今様の正しさを証明すると同時に、いかに傀儡女が慎重に秘曲を継いでいるかが描き出されている。熾烈な争いをすればするほど、読者は今様鍛錬の厳しさを、正統に真の秘曲を継ぐことの誉れを知る。後白河院は乙前を唯一の師とし、青年期に多数の傀儡女から伝授された今様の節も、全て乙前のものに覚え直した。ここには、乙前が一子相伝で継いだ今様を歌う院もまた、正統な流れを汲む歌い手であると示す意図もある。

続いて、源清経(3)による新人傀儡女の初利ちり、初声はつこゑへの厳しい稽古の様子を、乙前が述懐する場面。「夜は余り眠たしと佗しがりて、初利は、外へ立ち出でて水に眼を洗ひ睫毛を抜きなどしけれど」……睫毛を抜いてまで眠気を覚まし、徹夜で今様稽古に励む彼女たちの腫れた目や枯れた声までもが伝わるようである。

「単なる音芸」として捉えられていた今様だが、傀儡女たちは決して娯楽などとは考えていなかった。院が時に生々しいほどに彼女たちを描いたのは、傀儡女にとって今様は現世を生き抜く術であり、そこには人生とプライドを懸けた鍛錬があったのだということを示すためだったのではないだろうか。

さて、自身も相当な稽古を積み、ついに受け継いだ正統な今様の技術を、院はどのように次へと繋いでいくのか。『口伝集』卷十前半は、宮中の側近たちの歌唱の評価で締めくくられる。

としごろかばかりたしなみ習ひたることを、誰にでも伝へて、そこ流れなども、のちにはいはればやと思へども、習ふ輩あれど、これを継ぐべき弟子のなきこそ、遺恨のことにてあれ。殿

上人、下臈にいたるまで、あひ具してうたふ輩はおほかれど、これを同じ心に習ふものは、一人なし。

冒頭から以上のことを断言しているため、弟子評価も厳しいものである。

「大様は我が様にてありて、みな人、我がたがはぬ弟子どもと思ひあひたれど、たがへることおほかり」「いと我に習はぬ歌をも、我が様我が様といひて、表に心にまかせてうたふぞ、亡からむあとに、我が名や折らむずらむとおほゆる」……これらの評価を見れば、院が後継者に何を望んでいたのかが一目瞭然である。乙前から継いだ今様の技術を「我が様」と記した院は、中途半端な者がその流派を名乗ることを許さない。

これらの弟子講評からは、「我が様」を守る」という院の利己的な思惑が読み取れる。不完全な者に軽々しく今様の歌声を「我が様」と吹聴されることが我慢ならなかったのだろう。「口伝集」巻十前半部分は、従来の編纂意図としてある「歌を後世に残せない悲しみ」を伝えるためでなく、正統な伝授を受けた「我が様」が存在したこと、そしてそれを歌える者は院以外に皆無であることの証明を目的に書かれたと捉えるべきなのではないか。

三 今様示現譚

『口伝集』巻十後半、ついに院が実際に体験した今様による示現譚が語られる。熊野での三例、加えて賀茂、叡島、石清水と、一六〇年〜一七八年の間、各地で六回にわたって起きた神の感応は、時系列に沿って、明確な年代や立ち会った人々に至るまで事細かく描写されている。院は「今様示現譚」を確立させるため、あらゆる

点で工夫を施しており、清盛の登場や、巫女の託宣による往生確約など、院自身の願望や意図に沿った構成となっている。ここでは六度起きた示現譚のうち、三例を取り上げる。

①熊野 第一回目

我、永暦元年十月十七日より精進を始めて、法印覚讀を先達にして、二十三日進発しき。二十五日、厩戸の宿に、為保、左衛門尉にてありしに、それが具したりし先達の夢に、「このたび参らせ給ふはうれしけれど、古歌を賜ばぬこそは惜しけれ」と、見たる由を申す。「もとより王子にては、する事をばするに、御歌などはあるべきものを」など言ふ者ありしかど、「あまり下臈がちにて、顕祖にや」など言ふ者もありて、ありしほどに、かく夢のことを聞きて、左右なく歌はむとて、厩戸を夜深く発ちて、長岡の王子に夜のうちに参りぬ。

相具したりしかば、太政大臣清盛、大式と申し折なるべし。参りあひてありしに、この夢を言ひ合はせしかば、「さること候はば、さこそ候なれ。沙汰に及び候はぬ」由を返事に申して、心のうち「いたく雑人など数多ありて、いかが」と思ひける程に、Aきと寝入りたりけるに、東帯したる御前具して、唐車に乗りたる者、御幸のなるやらむとおほしくて、王子の御前に立てたり。Bこの歌を聞くにかと思ひて、きと驚きたるに、今様をある人出だしたりけり。その歌に曰く、

熊野の権現は 名草の浜にぞ降りたまふ

和歌の浦にましますば 年はゆけども若王子

これを、驚きて、資賢卿に語りてあさまれける。夢に思ひ合

はせられて、人々、現兆なる由を申し合ひたりき。霜月二十五日、奉幣して、経供養・御神楽など終りて、礼殿にて、我音頭にて、古柳より始めて、今様・物様まで数を尽くす間に、やうやうの琴・琵琶・舞・猿楽を尽くす。初度の事なり。

院の生涯三十四回に及ぶ熊野詣の初回に起きたとして、第一回目の示現譚。院が見た夢ではなく、熊野詣の先立をつとめた法印覚讃、そして当時まだ大式であった平清盛が見た夢によって、神が院の今様を求め、それに聞き入っていたことを伝えた、という話である。

この示現が起こった永暦元年の前年には平治の乱が発生している。武士・平清盛と源義朝が争い、清盛が勝利した戦いであり、以降、清盛は勢力を強め、院の力をも凌ぐほどとなり、鹿ヶ谷の陰謀へと繋がってゆく。この示現譚が執筆されたのは、「わが身、五十余年を過ごし……」という記述から、一一七八―一一八〇年代であると推測できる。つまり平家滅亡後、院はあえて初回熊野詣で経験した初めての示現に、清盛を登場させているのである。

注目すべき点は「心のうち」「ある人」という言葉である。冒頭は「我」で始まるこの示現譚であるが、意図的に語り手が清盛へとシフトチェンジされている。院は、自身の手によって清盛の心の内までも描写する。院に口を合わせておいて、胸中では神の示現を訝しがっていた清盛が、ふと寝入った夢で唐車に乗り正装をした高貴な人物がある人Ⅱ院が今様を歌っているのを聴く夢を見て、飛び起きる。そこからは『平家物語』で想像するような傍若無人な清盛像はない。院のいち部下として、物語に必須である少々滑稽な第三者

の役割を果たしている。

院は、前半部分で散々述べてきた自身の今様鍛錬の成果を、自分は「ある人」という位置から動かないままに、まずは長年の宿敵であった清盛に証明させているのである。

②熊野 第二回目

應保二年正月二十一日より精進を始めて、同二十七日発つ。二月九日、本宮奉幣をす。三の御山に三日づつ籠りて、そのあひだ、千手経千巻を転読したてまつりき。

同月十二日、新宮に参りて奉幣す。その次第常の如し。夜ふけてまた上りて、宮巡りの後、礼殿にして通夜、千手経を読みたてまつる。暫しは人ありしかど、片隅に眠りなどして、前には人も見えず。通家ぞ経巻くとて眠りゐたる。やうやうの奉幣など静まりて、夜中ばかり過ぬらむかしとおほえしに、宝殿の方を見やれば、わづかの火の光に、御正体の鏡所々輝きて見ゆ。あはれに心澄みて、涙もとどまらず、泣く泣く読み居たるほどに、資賢通夜し果てて、暁方に礼殿へ参りたり。「今様あらばや、只今おもしろかりなんかし」と勸むれば、かたまりて居たる。術なくて、みづから出だす。

万の仏の願よりも 千手の誓ひぞ頼もしき

枯れたる草木もたちまちに 花咲き実生ると説いたまふ

B 押返し押返し、たびたび歌ふ。資賢・通家付けて歌ふ。心澄ましてありし故にや、常よりもめでたくおもしろかりき。

覚讃法印、宮巡り果てて、御前なる松の木の下に通夜して虚たりけるに、その松の木の上に、「心解けたる只今かな」と歌

ふ声のしければ、A 夢現ともなくかく聞き、あさみて礼殿に参りて急ぎ語る。一心に心澄ましつるには、かかる事もあるにや。夜明るるまでには、歌ひ明かしてき。これ第二度なり。

前回から二年後、二回目の熊野詣での出来事である。今様歌い替えの当座性もさることながら、この示現譚では、傍線部「心解けたる只今かな」という、覚讀法印の夢の中で院の歌を聴いた神が歌ったといわれるこの一節に注目したい。この今様は賀茂で起きた四度目の示現譚にも登場し、

ヤ春のはじめの ヤ梅の花 ヤ喜び開けて実生る花ム
ヤお前の池なる薄氷ム 心解けたる只今かな

(朗詠九十首抄)

という今様が元となっている。賀茂で同様の今様が歌い替えされた際、院は内裏での敦家の見事な歌い替えを連想している。藤原敦家とは、白河院期に今様の名手とされた人物である。金峰山参詣の帰路で頓死したことに基つき、熊野参詣の際、その声のあまりの美しさに神に召しとどめられ、その身内へと昇格した、という説話が流布したほどであり、『口伝集』巻十においても「敦家、声めでたくて、御嶽に召し留められて御眷属となり」と引用されている。その伝説的説話から、院はこの示現での神に敦家を連想させるため、神が歌った今様としてあえてこの歌を選んだのではないだろうか。今様によって人から神へと変わったと伝えられる人物の感応を得た、という示現譚からは、院にもその可能性が大いにあるのではないかと読者に想像させる。

③石清水八幡宮

我、八幡に参りて、十ヶ日籠りて、千部経をはじめて読みしに、九月二十日より籠りたりしに、二十五六日のほど、経果てて、今様を御前にして夜もすがら歌ひき。

夜中におよぶほどに、足つつみたる女の、中門のもとに親盛居たる所に寄りて、うしろを引く。申しけむに、「何わざ言ふ」とて聞きいれず。また寄りて、たびたびになる折、見かへりてみれば、勸学院の厨女なりけり。言ふことを聞けば、

「A 夢に、この階隱の柱のもとに、うつつくしき稚児の十二三ばかりなるが、うらうへに、一人は薄青の御狩衣に織りたる脇開を着たまひたるが白馬に奉り、いま一人は白き薄物とおほしきに、下は紺灰に見ゆるを召して、斑なる馬に乗りて、うらうへに立たまひて、この御歌を聞かせたまふとおほしく見え候ひて、B うち驚きて候へば、

峰の嵐の激しさに 木々の木の葉も散り果てて

この歌の盛りにおはしますに、右の後ろを向けて居させたまひたるぞ」

と告げ申す由を、おこしに來たるなり、と申しけり。この女、「夢の中に、若宮のこの御歌を聞かせおはします」と覚えし由を申す。

さて、次の夜、若宮に参りて、今様の会、終夜ありてのち、乱舞・猿楽・白拍子、品々しつくしき。治承二年九月二十四日のことなるべし。

この示現譚の二年前に、建春門院が死去している。鏝であった滋子の死により、平家との関係は悪化。前年には延暦寺との抗争、清

盛の裏切りによる院近臣の処刑（鹿ヶ谷の陰謀）が行われた。そしてこの参詣の翌年、院は清盛に幽閉される。一一八〇年から治承・寿永の乱が起き、一一八一年ついに清盛は事切れるという、混乱を極めた時期での示現である。

構成としては院の歌う今様を稚児姿の若宮が聞いていた夢を第三者が見て知らせるというもので、またも院自身は知り得ぬ場所で見現が起きている点に着目したい。その場に居合わせない者が示現を受けることで院の今様の力の強さを証明すると同時に、「第三者である」ということが示現譚の信憑性を高める。同様の構成は先に挙げた熊野での示現二例だけでなく、前段で登場した乙前の死後、院が供養のため歌った今様に、女房の見る夢中で乙前が感応した、という場面においても使われている。本作最後に語られる今様示現譚にして、その構成がここで完成したともいえる。

以上、示現譚三例を見てきたが、話型の確立にあたって、何らかの先立つものがあつたはずである。そこで考えられるのが、院が今様と同様に傾倒していたという「説経」による示現譚である。

経を用いた勤行による示現や靈験譚は『日本靈異記』（法華経写経・聞法）、『日本往生極楽記』『大日本国法華経験記』『宝物集』『発心集』（説誦）などに語られる。中でも『大日本国法華経験記』（成立一〇四〇—一〇四四）は、靈山信仰や神祇信仰との交渉も多数見られる点に特徴がある、法華経持経者の説話集である。上・中・下の三巻に、計百二十九話を収め、日々法華経を説誦することで過去の未来の罪業を消滅し、輪廻の繫縛を脱する、という話が非常に多い。今様示現譚同様、神が登場する説話と比較してみると、その話型が酷似していることに気が付く。以下、例を挙げる。

『大日本国法華経験記』下 第八十六

道命阿闍梨が、京都にある法輪寺に籠り勤行しているとき、一人の老僧もまた法輪寺で勤行を始めた。^a老僧が夢を見たことには、御堂の庭に上達部の貴人たちが隙間なく訪れており、よく聞くと貴人たちは金峰山の蔵王や、熊野権化、住吉大明神、松尾明神など、阿闍梨の法華経を聴聞するために訪れた神々だという。^b神々が阿闍梨の説経を称賛しているところで目が覚めると、丁度阿闍梨が礼堂で法華経第六巻を高らかに読誦していた。老僧は涙を流しながら、阿闍梨に礼拝したそうである。

『大日本国法華経験記』上 第二十一

沙門光日は、叡山東塔の千手院の住僧なり。一乗に深く渴仰を生じて、三宝に祈念すらく、願はくは法華を誦して、剋念限りなからむといへり。一部を説誦せり。居を梅谷に占めて、数年、隠居せり。中閔白殿の北政所、特にもて帰依し、日供衣服を、厚くもて奉献す。老に臨みて愛太子山に移り棲り。妙法の巻数万余部に及ぶ。籠居精進して、数十年を経たり。宿願あるに依りて、八幡宮に詣でたり。夜御前に侍りて法華経を誦せり。^a傍の人夢に見らく、宝倉の内より、童子八人出で来りて、拜礼随喜し、妙なる香花をもて光日聖に散して、口唱讚歎して、八人舞ひ遊ぶ。また神殿より声を出して讚めていはく、如是聖者、必定作仏、長夜光明、冥途様日といへり。^b夢覚めてこれを見れば、光日聖法華経を誦せり。乃至齡尽きてこの界を去るときに、全くに一部を誦し、作礼して去るに至りて滅に帰せり。

先に挙げた今様示現譚①～③と比較し、対応部分を傍線部A a、B bで、神の感応を波線部で示すと、

A a 第三者が夢に、神が(今様／経)を聞く様を見、目覚めると
確かにB b(院／持経者)が声高らかに(歌って／読経して)いた。

という構成が浮かび上がる。読経による示現譚と類似した話型で今様示現譚を語ることで、音芸と認知されていた「今様」に、正式な勤行である「読経」と同様の霊験があるということをも具体的に証明する効果が生まれる。「大日本国法華経験記」では挙げた例に限らず、法華経説誦をはじめ、写経、聞経など勤行を重ねた末の往生や霊験譚が多い。法華経信仰のために書かれた説話集同様、『口伝集巻』巻十は声技そのものを残すためでも自叙伝でもなく、「宗派を超えた神仏への敬意表現方法としての今様信仰」を促す材料として編まれたのではないだろうか。

四 今様と読経

では、今様と読経という二つの声技の間にはどのような差異があるのだろうか。

仏の声は「経」に置き換えられて伝えられ、信仰によって文字から音へと再生されてきた。信仰心をもって経を読むことを「読経」といい、鎮護国家・五穀豊穰・病氣平癒・怨霊退散・鎮魂供養などをもたらす力があるとされてきた。更に経を読む際に、節をつけたものを「声明」という。清水真澄氏は、「仏教に限らず、広く音声に霊力が宿るとする思想を、音霊信仰という。また、言葉に霊力が宿るとする思想を言霊信仰という」と、信仰表現としての音声につ

いて述べている。今様に傾倒した院は、勿論読経や声明にも熱心であった。『読経口伝明鏡集』には、天台声明の門に入り、熱心に修行した院の様子が残されている。更に清水氏は、都市を駆け巡った今様の「流動性」を指摘した上で、

声技の世界では、読み上げる経文、説かれる教えの音の一つ一つが信仰の対象であった。法音を口にするとき、仏の化身であることが明らかになる。そのような信仰があった。けれども、その声には秘伝・口伝が存在する。それは、実子創伝であったのだ。今様はそれを暗に揶揄するのである。(略)

『声明口伝』には、声明を具体的に演唱するうえでの注意がある。(略)これらは己の小技に慢心して、音律の妙所に到達できないことを戒めたものである。声明は、法音の再現を根幹に置く行法であり単なる音芸ではない。信仰の表現であることが重要なのである。

と述べている。今様はその流動性でもって、堅苦しく伝統を重んじる読経を揶揄していた、というのである。つまり、勤行として読経を行う高僧らからすると、「今様」は単なる音芸であり、都市に雑多に流布するものとしての認識しかなかったのだ。継承の担い手についても、読経や声明においては「持経者、説法師、声明師」などと呼ばれ、彼らの正統な系譜も多く現存している。一方、今様の担い手は芸能や売春を生業とする名もなき傀儡女たちであった。院に合わせて今様を歌う宮中の者たちの根底にも、今様を軽んじるバイアスは常にあったのではないだろうか。声技に縁のない者や持経者にとっては、正統な伝授を守る読経に対し、流動しながら民衆に愛好された今様とは、元々対照的なものであったのである。読経・

声明には博士(楽譜)も積極的に作成され、芸能というよりも仏の言葉や学問としての側面が強かった。おそらく、今様に「秘曲」が存在するということも知られてはいなかっただろう。

以上のように「読経」を知った上で示現譚を見返すと、一般的には音芸という認識が強かった「今様」により神の示現が起きたことの意外性が見えてくる。なぜ院は、神との交流の手段に読経ではなく今様を選んだのか。その理由として、今様の持つ「声」「音」、そしてそこから生まれる「歌い手との統合性」を挙げる。

中世において、「微音(小きな声)」は聖なるもの(神仏、天皇)の出すべき声であるとされていた。一方、「高声(大きな声)」は、聖なるものと交信するための声であった。本来聖なるものの側である後白河院が、喉を枯らすほどの大声を何百日も出して鍛錬するということの異常さが分かる。と同時に、「今様」の高声によって神と呼応し、靈験を得られるという信仰に繋がるといことも理解できる。

更に、今様の「音」について、

60 釈迦の法華経説く始め 白毫光は月の如

曼荼羅万寿の華振りて 大地も六種に動きけり

39 万の仏の願よりも 千手の誓いぞ頼もしき

枯れたる草木もたちまちに 花咲き実熟ると説いたまふ

というように、原則四句七五調で成り立っており、読み上げるだけで自然と節が付いてしまう。この特徴は、神がその意志を伝えるため、夢や巫女を通して人間に贈った「託宣歌」にも共通するよう思われる。例として二首を挙げる。

1855 夜や寒き衣やうすき片そぎの行合ひの間より霜やおくらむ

(『新古今和歌集』神祇歌)
688 なでしこの薄くも濃くも日暮るれば見む人分きて思ひ定めよ
(『統古今和歌集』神祇歌)

どちらも掛詞や押韻が多く、読み上げると不思議な調子を感じる。折口信夫の言葉を借りるとすれば、これは神仏の言葉に存在する独特の情調である。勿論、これらは本当に神から人に送られたわけではない。その音に神性を感じさせるからこそ、情調ある和歌が託宣歌として現在に伝わっているのである。今様はその形式上、今様である限りその言葉の羅列に調子が生じる。経などの漢文でない、我が国の言葉の羅列の中に情調を感じたとき、中世の人々はそこに神との感応を期待したのではないだろうか。

院は、今様を歌う上で、天性の「声」質に拘ってはいる。しかし度重なる示現に繋がる今様の歌声とは、やはり四十年以上の鍛錬があつてこそ得られるものであると自負している。「声」を用いて人から神に訴えかける手段としては、先述の通り今様以外にも読経、声明、朗詠など様々な方法がある。また、鐘の音や笛、太鼓、琵琶など、神へ訴えかける「音」もある。中世において、神は高いところに存在するとされていた。そしてそこに届くほどの高く澄み渡る美しい声音こそ神と繋がる手段であつた。

その中でもなぜ院は今様を選んだか。それは、言葉、心、状況、背景だけでなく、声、調子、音程など、様々な要素を組み合わせてようやく、その人の歌う「今様」が完成するからなのではないだろうか。それが、「歌い手との統合性」である。言葉の面では、読経よりもはるかに自由に率直に、神仏と交信することができる。音魂の面では、問のとり方やしゃくりなどの振り、節回し、そしてなに

より個性としての「声質・声色」があり、琵琶や琴などよりもはるかに演奏者と発せられる音の統合性が強い。何度も繰り返し歌い、トランス状態に至ることも、示現を得る場では必要な条件であった。その裏には、異常なまでの鍛錬がある。この「今様を鍛錬し、折に合う言葉を中心澄まして高声で歌うこと」は、人から神へのコミュニケーションの究極状態であり、和歌などによる神からの「託宣」の逆行といえるのではないか。

つまり、神が用いる情調をもって私たちから神に訴えかけるという点で、「今様」には特徴がある。更に、言葉、心、状況・背景だけでなく、声、調子、音程など、様々な要素を組み合わせてようやく、その人の歌う「今様」が完成する。和歌や経より遙かに自由に率直に、神仏と交信することができるのである。これらの思想が、院の今様信仰を支えたのではないかと考える。

おわりに

院は今様と読経の間に、認知されていなかった以下の共通性を示した。

今様―読経

- ・ 鍛錬、修行の重要性
- ・ 秘曲の存在
- ・ 伝授の秘伝性
- ・ 酷似する示現、靈験

傀儡女との交流を描くことで今様秘曲の正当な伝授を示し、法華

経靈験譚の話形を効果的に用いて示現を語ることで今様に読経と同様の効果があると裏付けた。後白河院は自身の人生そのものを土台に、今様信仰が読経と同じ次元の高尚なものであると、前半〜後半への流れのなかで証明したのである。「単なる音芸」であった今様は、「口伝集」巻十の中で、独立した信仰表現の技法として「こゑわざ」となる。冒頭より始まる「そのかみ十余歳の時より今にいたるまで、今様を好みて怠ることなし。……」という格調高い文章からは、今様を単なる芸能とは捉えていない院の確固たる自信が読み取れる。宮中において、根底では軽視されていたそれらに真摯に向き合った院が、自身の鍛錬の記録、歌う今様の正統性の証明、そして往生の確約を得るために書いた作品。それこそが「梁塵秘抄口伝集巻第十」だったのである。

本作品を、院は以下のように締めくくる。

おほかた、詩を作り、和歌を詠み、手を書く輩は、書きとめつれば、末の世までも朽つることなし。こゑわざのかなしきことは、我が身崩れぬるのち、とどまることのなきなり。その故に、亡からむあとに人見よとて、いまだ世になき今様の口伝を作りおくところなり。

院の言う「こゑわざ」とは、歌い手の声と言葉の持つ音、秘曲を探求し、習得するための鍛錬の過程、それら全てを包括したものを指す。院は、人生をかけて得た「真に正統な今様」という財産を、譜という一般化された形で後世に伝え、軽々しく「我が様」が流布していくことに我慢ならなかったのだらう。結果、今様は「梁塵秘抄」によって集大成されると同時に、院の没後儂く消えてしまった。しかし、むしろその消えゆく「こゑわざのかなしき」部分にこそ、

院は尊さ、神性を感じていたのではないかとも思われるのである。

歌い手が生きている限り宝のように自身を守り、「今」その瞬間の空気を、感情を、声をもって切り取り、神へのメッセージへと昇華することができる。その一瞬にこそ、後白河院の思う「こゑわざ」の「かなしき」、美しく愛おしい響きがあったのではないだろうか。

注(1) 現在の岐阜県大垣市青墓町。傀儡女の一大拠点。

(2) 小大進。正統な今様継承者である傀儡女の1人。

(3) 源清経。乙前の師である目井の夫。傀儡女の育成にも力を入れた。西行の外祖父。

(4) 後白河院の熊野信仰は篤く、三十四回の参詣は歴代の上皇のなかでも最多であった。

(5) 『郭曲相承次第』

(6) 『口伝集巻第十』にて、八十四歳にして病に倒れた乙前を院が見舞い、今様を歌う場面が描かれる。乙前は「経よりも愛で出でて」と泣いて喜ぶが、同年二月に亡くなる。院の悲しみは深く、乙前の往生を願う一年を懸けて法華経千部を誦経した。

(7) 清水真澄『説経の世界 能説の誕生』(吉川弘文館 二〇〇一)

(8) 『元亨釈書』『説経口伝明鏡集』

(9) 『愚管抄』「院ハコノ次ノコトヲヲボシメシワツライケリ。四宮ニテ後白河院、待賢門院ノ御ハラニテ、新院ニ同宿シテヲハシマシケルガ、イタクサタバシク御アソビナドアリトテ、即位ノ御器量ニハアラズ」と、近衛天皇崩御時という有事においても、今様など芸能に耽る後白河院が即位の選択肢になかったことが読み取れる。

(10) 網野善彦『ことばの文化史 中世1』(平凡社 一九八八)

(11) 折口信夫『言語情調論』(中央公論新社 二〇〇四)

受贈雑誌(二)

學習院大學國語國文學會誌

學習院大學國語國文學會

學習院大學大学院日本語日本文

學習院大學大学院人文科学研究

學 科日本語日本文学専攻

学燈 丸善

金沢大学国語国文学会

金沢大学国語国文学会

金澤文庫研究 神奈川県立金澤文庫

岐阜聖徳学園大学国語国文学会

岐阜聖徳学園大学国語国文学会

京都教育大学国文学会誌

京都教育大学国文学会

京都語文

佛敎大学国語国文学会

京都大学國文學論叢

京都大学大学院文学研究科国語

学国文学研究室

キリスト教文学研究 日本キリスト教文学会

金城日本語日本文化 金城学院大学日本語日本文化学会

近代 神戸大学「近代」発行会

近代文学研究 日本文学協会近代部会

群馬県立女子大学国文学研究 群馬県立女子大学国語国文学会

藝文研究 慶應義塾大学芸文学会

言語の研究 首都大学東京言語研究会

言語教育研究 拓殖大学大学院言語教育研究科

言語表現研究 兵庫教育大学言語表現学会